

杉を見に行き、ついに大イタヤカエデにめぐり会うことができました。〇〇指定が早急に実現されますよう望んでいます。(今年の大雪にも負けずに健在です。)

先生の思い出その2。「美声」

音楽にとっても詳しいとお聞きしておりましたが、清水峠での美しいお声に本当に疲れ(?)も忘れ……。

(昭和65年3月24日消印)

## 尾崎先生の思い出

荘 司 宏 明

先生に初めて逢ったのは、83年10月30日与板十成山での採集会でした。会員になってまだ日の浅い私にとって、採集会というものは植物の名前を覚えることと同時に、じねんじょ会会員の方の名前も覚え、さらに各氏の生態行動を詳細に観察するという意味で、非常に重要な行事であると考えております。

その日は、あいにくと、冬將軍の到来を予告するかのような、北風が強い日でした。八坂神社きわの坂道を登って行くうちに、ふと、前に行く巻脚半姿の人に目がとまり、同行のS氏に「あの方は？」と聞いたところ「ああ、彼がじねんじょ会の御家老、尾崎先生ですよ」と教えられた。私はその姿に、なにか珍しいものでも見る思いでしばし見とれました。特に興味を感じたのは、その脚半の巻き方で、ちょうどコバンソウの小穂を連想させる形に見えて、印象的でした。足を保護するためか、それともファッションのつもりで巻いていたのか、定かではありませんが、いずれにせよ、大切な足に対する気配りというものを感しました。昼食後の勉強会、先生は「新潟市植物資料室概論」について講義されました。しかし、なにしろ、肌寒い日であったため、西山氏差し入れの教材に、つつい手が出てしまい、話の半分は気化してしまいました。

(晩秋の一日、83年最後の採集会の思い出)。

今年も河渡周辺の空き地には、コバンソウがたくさん咲いております。コバンソウの小穂を見つめ、巻き脚半を連想、そして尾崎先生の姿を思い出すごころです。

(昭和60年5月13日消印)

## 思い出すままに

渡 辺 正 之

大学生の時、米山の採集会に参加しました。山頂の小屋に着いたのが夕方薄暗くなってからです。早速、カレーライスをつくることになりました。野菜の皮をむき、適当な

大きさにきざんでから煮るのが普通の手順です。ところがなぜか、タマネギをきざむのが面倒になり、最後の一つは皮をむいただけで、丸ごとコッフェルに放り込んでしまいました。

かくして夕食の準備が完了。アルコールと共に楽しい食事になりました。きざんでないタマネギはカレー味というよりも、タマネギ味そのものだったように記憶しています。

真夜中、のどの渇きに耐えかねて目が覚めました。私の動く気配で眠りを破られたのでしょう。となりで横になっておられた尾崎先生も目を覚まされて、「夕食のカレーはいささか辛かったなあ」と言われました。水筒の水を分けてもらい、二口、三口飲んで再び眠ったようです。

小松原湿原では、みんなで手分けして記録をとることになりました。先生とペアを組んで、湿原に散在するツツジを中心とした灌木の小さな固まりを調べるわけです。各小集団ごとに混ざっている植物に違いも見られ、どのようにして記録を取って行けばいいのやら困惑したまま突っ立っていました。先生から、記録を取るまえにいくつかの固まりを観察してみようと言われました。そうすれば、これがこの湿原で最も典型的だという基準が出てくるし、そうなれば、それとの比較で記録がしやすいだろう、との判断です。あちこちと先生の後ろについて歩き回り、ようやくのことで、これを基準タイプにしよう決めました。その間、先生が木に登り額に片手をかざして湿原を見渡したりもしました。この様子を私のカメラのモノクロフィルムにおさめ、後日先生にお贈りする約束でしたが、この約束は今だにはたしておりません。大変申し訳なく思っています。

飯豊連峰や朝日連峰でも大変お世話になりました。朝日連峰の時は、案内状をよく読まないままに集合場所を間違えてしまい、集合時間に遅れて先生をはじめ皆様を迷惑をかけてしまいました。佐瀧や朝日岳へのお誘いも結局無にしてしまい、今思うと心残りです。思い出していくと、迷惑をおかけしたなあとか、お世話になったなあといったことばかりが浮かんできます。

これからも御指導をよろしくお願いいたします。

(昭和60年3月25日消印)

## お世話になって12年

柄 澤 朋 暢

個人的なことから書き出して恐縮だが、筆者はこの3月で30歳になった。そしてこうやって植物同好じねんじょ会の通信誌に稿を寄せているのだから植物の勉強を人生の糧としていることに間違いは無い。いつ頃から何故植物に

興味を持つようになったのか、この事を考え振り返ると12年前大学に入学した年の尾崎先生との出会いにまでさかのぼる。ここでは筆者が植物の勉強を始めるきっかけとなり、また尾崎先生との出会いの場となった環境庁の植生図の仕事を中心に現在に至る尾崎先生との思い出を振り返ってみたい。

昭和48年、筆者は新潟大学農学部に入學した。当初は農学部で昆虫の勉強をしたいと漠然と考えていた。機会あって病理の和田先生に相談に乗っていただき、「新大には昆虫の先生はいないからあきらめなさい」とご指導いただき、どうしたものかと戸惑っていた。そんな頃、南高校生物部の先輩である高橋準さんから環境庁の植生図の仕事を手伝わないかと誘われた。その仕事の実質的なキャップが尾崎先生であった。当時筆者は植物の事なんてまるで分からない、全くの素人であった。確か9月から作業を始め、年度末の3月までの6ヶ月間に県内の5万分の1の植生図を揃え、更にそれを元に新潟県の20万分の1の植生図を書き上げるという恐ろしくハードなスケジュールだった。思えば作業母体である県の自然保護課も発足間もない頃で、誰もが手探りの様子だった。作業開始が9月だったため十分な現地調査も出来ず、ほとんどが航空写真の読み取りによるトレースで作業を進めざるを得なかった。尾崎先生、準さん、そして筆者のスタッフ3人で毎晩白山浦の電車通りに間借りした作業所で「ここはブナだ」とか、「これは雪崩の跡だ」とかあるいは「こんないいかげんな物恥ずかしくて環境庁に出せるか」とかワイワイガヤガヤ言いながら仕事を進めた。何しろ提出期限は決まっているのだから、徹夜に近い状態が何日も続いた。こちらは身軽な学生なので、作業所に泊まり込んで終日地図と悪戦苦闘しているのであるが、尾崎先生は昼は中央高校で教鞭をとり、夜は我々の夕食を持って白山浦の作業所へ寄る、という生活を半年間続けたのである。今思い返してみると、この嵐のような半年間に筆者は昆虫をやめて植物の勉強をしようとい心に決めたようである。とにかく植物に関する知識は全く無いので、作業を進めながら必要な本を読み、尾崎先生にご指導いただくという毎日であった。ヤブツバキの分布がどうか、ブナの線を決めるにはどういう要素を見なければならぬとか、必要なときにその都度教えていただいたようである。あの頃の尾崎先生の教をノートしておけば、植生図作りの貴重なノウハウとなっていたはずである。惜しいことをした。それから、数少ない現地調査も貴重な体験であった。確か加茂や五十公野へ行った。現地では植生調査の実際を教えていただき、天候や時間の制約を強く受けるフィールド・ワークの方法を学ぶことができた。なお、現地で加茂の坪谷さんや長岡市立科学博物館の西山さんと面識を持っていたのも、筆者にとって大きな財産となった。こうやって試行錯誤の末、期日間際にようやく納めることが

できた。出来上がった植生図を見返してみると、今なら恥ずかしくて人前に出せないようなお粗末な物である。しかし地図上の線の一本一本に思いでの残る労作であることに間違いはない。植生図を広げるたびに、あの当時白山浦の安アパートで先生と議論をしつつ地図に色を塗っていた日々が、懐かしく思い出される。

この植生図の仕事以来、機会ある毎に尾崎先生に植物の事を教えていただいた。思い出すままに揚げてみたい。昭和49年、50年に瓢湖・福島湖の調査。夏の暑い時期に浮き島の調査をしたり、船の上からコウホネの写真を撮りながら水中に落ちたり、散々な目にあった。まとめの段階では先生のお宅の暗室で、幾晩も報告書に載せる写真を焼いた。最近やった「新潟県のすぐれた自然」のまとめでもそうであるが、どうも尾崎先生との仕事は、最後は締め切りに追われて徹夜の作業になることが多い。

公的な調査だけではなく、私的な調査旅行にもよく連れて行っていただいた。先生の車に寝袋と新聞紙を積んで出掛けるのである。長い旅行では、茨城大学の学会へ出席するのを兼ねて、北関東の山々を歩いた事があった。地図を見ながら気の向いたところへ行き、車で寝ながらあちこちの丘陵を調査して回った。これは昭和50年3月から4月にかけての時期だったと思うが、栃木県仏頂山で初めてアオキ (var. japonica) の採集が出来たので大変印象深い山行となった。それから、ヤマモミジとヒメアオキの分布を追いながら日本海岸を南下し、琵琶湖近くまで一週間ほど車で走った事もあった。若狭の小浜湾でタブ林のむこうに沈む夕日を眺めたのが、つい昨日の事ようである。確か昭和53年5月の事である。こうやって尾崎先生と出掛けるときはほとんどの場合、先生が運転し、筆者が食事の準備をするような役割分担であった。今思うと随分いかげんな食当で、得体の知れない木の芽や葉っぱを食べさせたようだった。この他、二人きりではないが、数人で行った調査旅行は数え切れない。石沢先生、白崎先生と一緒した山形県飛鳥も愉快であったし、養護学校の関繁雄先生と一緒した小笠原諸島も、忘れぬ思い出である。手もとの標本台帳を見ていると、ほとんどの採集地に尾崎先生と一緒していることが分かる。筆者の植物の勉強は尾崎先生と共にあったと言っても過言ではない。この4月からは市の植物資料室に移られるそうであるが、筆者も市内に異動が決まり、これから益々ご指導いただく機会が増える事であろう。いつまでも健康でご活躍願いたい。

(昭和60年3月6日)